
死にたがり

燐光蘭歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死にたがり

【Zコード】

Z0312BA

【作者名】

燐汎蘭歌

【あらすじ】

不意に現れたあの子。彼女はいつだって。面倒を見る俺の身にもなってくれ。過去ともいえる世界へトリップした少女。死にたがりな少女はその世界で、何を見て変わっていくのか。

二週間に一回の更新になるかと思います。
別所にて同じものを書いています。

「殺すなら、殺してください。その方が気が楽です」

「なつ……」

「なんなら、自分で死んだ方がいいですか？」

その少女は突きつけられた鉄扇を見ようともせず、ただ相変わらず感情のこもらない目を三成に向いている。

淡々と紡がれる大よそ十一、三歳の少女が口にするとは思えない言葉に、感情はない。

それを見て、聞いて、ぎょっとしたように三成が数歩下がった。いつでも抜けるように小太刀へかけた俺の手は震えていた。人じやない。そんな感覚。

そんなの構わないと言つたように立ち上がった少女は障子を開ける。何をするのかと思えば、欄干に足をかけ、そこを蹴り外へと体を躍らせた。

いきなりの事にとつさに動けなかつた。ふわりと浮いた体はすぐに落下していく。

「一ひりー危ない」としちゃダメでしょうー！」

「……なんですか？」

「なんでつて……あなたねえ！」

落下の直前、近づいていたねね様が少女の腕を掴んでいた。
声だけしか聞こえないものの、少女の声に初めて感情がこもつた。

不思議そつな声。さつとお説教をとねね様は思つたに違ひない。でもそのままはと思つたのか、少女の体を引き揚げる。

引き揚げられ、不思議そつな表情をしている少女にねね様はお説教を始める。長いんだよな、お説教…。

置いてけぼり状態の三成と秀吉様、俺は僅かに苦笑。

「一人はどう思つ?..」

「どう、と言われましても…監視下に置くか、追い出すか、どうかだと思いますが?..」

「俺も、それしかないのではないかと」

「ま、それもそつじやな

三成と俺の言つ事に秀吉様は頷く。正直、それしかないよな…ほんの少し前、この部屋の中へ落ちてきたあの子。

いや、落ちてきたと言つては語弊があるか。天井を破つたわけではないし…

乙霧雨菜と名乗る彼女。

ずっと先の未来から来たと言つて、今の時点で不思議そつにしていて以外に感情が無い。

聞者の類であるならば早急に追い出すべきだと思つ。でも、それはなぜかしてはいけない気がする。

「お前様…」の子暫くここで面倒見てもいいかい?ちょっと常識教え込まないと」

「まあ、ねねがそう言つなら。つーわけじや、ここでおればええ」

ねね様がお手上げだと直つよひ声を上げる。ねね様がお手上げだなんて珍しい。

それを受けて秀吉様がそつ雨菜に言えれば、三成は氣づかれなつよう

に小さくため息をついた。

内心、反対なんだろうな。きつと。

一方で、雨菜は相変わらず不思議な表情を変えない。

「怪しいなら、追い出せばいいじゃないですか。そうすればここ

事知らない私は勝手に野垂れ死にますし」

「貴様はいい加減口を慎め！」

「三成、多分、彼女に何言つても無駄だと思つんだけじ。ついでこ、
ねね様にも

「異たつみ、それはどうこう意味！？」

「いえ、何でもないつす！」

「ちつ……」

危うくねね様のお説教をいただきそつな気配に慌てて首を振る。な
んとか、お説教は回避。

三成は不機嫌そうに舌打ちした後部屋から出て行つた。

相当不機嫌だつて部屋を出る直前に秀吉様とねね様に一礼するの
は忘れない。

……俺も、ここにいる理由はねえし、部屋に戻るか。そう思つて膝
を立てた。そこでねね様と目があつた。

「ねえ、異。頼みたい事があるのだけれどいいかい？」

「……ええ、はい」

断る事は出来ない。と、言つよつ俺は、ねね様の頼みを断る方法を知らない。

幼い頃に拾われて、ねね様と秀吉様が実質両親の様な状態の俺は、どうもねね様に逆らえない。

「雨菜ちゃんの事、面倒見てくれないかい？」

「…分かりました」

予想通りの事に僅かに頬がひきつったのがわかつた。それでも何とかそれを誤魔化して頭を下げる。

ねね様は笑うと雨菜を連れて部屋を出していく。残つたのは秀吉様と俺。

「異も大変じやな」

「もつ、慣れたつす。それでは」

頭を下げて部屋を後にする。たぶん、ねね様が行つた部屋は予測がついてるし、何とかなるだろ。

「ああもう、田を離すとすぐやつなんだから…」

「……放つといつください」

「駄目」

もう何度目か分からぬ会話を繰り返す。彼女が現れてから早七日。雨菜ちゃんの行動が大体読めてきた。田を離すと直ぐに死のうとする。今日までにとった方法は三つ。

一つ、高い所から飛び降りようとする。これはねね様が毎度阻止している。

二つ、刃物で首筋や胸を切ろうとする。雨菜ちゃんのそばに刃物を置くなとねね様から命令。それでもどこからか見つけ出す。三つ、首をつるうとする。これはなぜか毎回紐がちぎれて失敗している。

それを毎日のよひに繰り返して、見つかるたびにねね様に怒られて、それでも懲りない。その根性はすごいと思つ。

「なんでそんなに私に構うんですか」

「ん? 別に、ねね様からの頼み事だし。死なれたら後味悪い

「理解できません。巽さんだけじゃない。三成さんも左近さんも、もちろんねねさんも」

「だから、後味悪いから。ねね様は放つておけないからだとは思つけど。つーか、こいつも言つけど雨菜ちゃんはなんで死のうとするの

？」

「……」

「はあ……」

まだだんまり。理由もなく死のつとするし、せめて理由ぐらい教えてくれたつていいじゃないか。
話すこともない、とりあえず切れた紐を片付けようと切れたのに手を伸ばしてまとめていく。

「私は」

「うん」

「生きてちゃいけないから、家族にも疎まれるし、唯一優しくしてくれた人も、死なせてしまった」

「だからって、雨菜ちゃんが死んでも何も解決しない」

「……」

また黙り込んだ。それでも話してくれたのは初めてだから、少し前進。なのか。
纏めた紐を捨てようと立ち上がった所で障子が開いた。開けたのは三成。

「巽、少し手伝え」

「ああ、今行く。雨菜ちゃん、大人しくしてよ」

「……」

三成の後について廊下を歩く。手伝い、何だろ? な。あり得るとしたら書庫に本を戻すか、若しくはそれ以外の力仕事。三成、そんなに力ないから。

「巽、あの娘は」

「ん? ああ、雨菜ちゃんの事?」

「そうだ。何がしたいんだ」

「さあ? 死にたがり、って」とぐらりしか解らねえ

三成から聞かれたのは雨菜ちゃんの事。正直、絶対聞かれないと思っていた。

初めて会つたあの日から、どうも三成は彼女の事を疑つていると言うか、何というか。まあ、つまりそういう感情しか持つてないと思っていた。

実際は、さうでもなかつたらしい。

「……そうか」

「ああ」

「悪いが、書庫に本を運ぶのを手伝つてほし」

「了承」

見事に話題を切り替えて予想通りの手伝い。さて、何冊ため込んだか。それによつて往復回数が変わる。

三成の部屋にたまつっていた本はかなりの冊数。大阪城の三成の仕事部屋と書庫を往復すること四回。よくこの手伝いをするもんだから、なぜか書庫の本の位置に詳しくなつてしまつた。

いくら俺が体力馬鹿とは言え、さすがに疲れた。三成も表面に出しえないけど、相当疲れてる。

三成の部屋で茶を貰つて一息つく。

「あいつはどうすれば大人しくなる」

「ん？ああ…さあ、まだわからんねえよ。つーか三成、雨菜ちゃんの事なんだかんだで気にしてんだな」

「なつ！？別にそんな事は」

「だつてそうだら。この前も雨菜ちゃん死のつとしたの止めてるわけだし」

「あの時は、たまたま見かけたから、止めただけだ」

一瞬慌てたものの直ぐにいつも通り。本当に三成は表情取り繕つのがうまい。

そんなんだから周縁と衝突を起こすんだ。それに気づいていないはずはないのだけれど。

この平穡者め。

「ま、そう言つ事ならそれでいいや。じゃ、俺はこれで。茶、ありがとな」

「ああ。すまなかつた」

三成の部屋を出て、どこへ行こうかと考えていればね様の部下の忍びと遭遇。

雨菜ちゃんがまたやらかしたらしい。今度は刃物を見つけ出したとか。

急いでその場へ向かいつつ、もう一人のある意味平穡者をどうするべきかと考える。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0312ba/>

死にたがり

2012年1月14日17時00分発行